慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	埼玉県立文書館蔵慶長五年正月廿一日賦何船連歌「梅か香は」注釈：上杉景勝主催の連歌
Sub Title	
Author	川﨑, 美穏(Kawasaki, Mion)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2020
Jtitle	三田國文 No.65 (2020. 12) ,p.139- 161
JaLC DOI	10.14991/002.20201200-0139
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20201200-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

埼玉県立文書館蔵慶長五年正月廿一日賦何船連歌「梅か香は」注釈

――上杉景勝主催の連歌――

川﨑　美穏

はじめに

埼玉県立文書館に、上杉景勝とその家臣たちが興行した連歌懐紙一巻が所蔵される。長野家文書に含まれる。

上杉家では、天正末年から慶長七年頃まで、領内及び上洛時の京都で度々、連歌と和漢聯句が行われていた。[1]

だが、会の実施記録が判明しても、当時の懐紙の所在は不明なものが多く、その全貌が明らかとなったとは言い難い。本稿で紹介する連歌懐紙も『鷲宮町史』[2]に、

熊谷の長野氏が伊勢に参宮したのも、また連歌師を迎えに行ったのも、それは表向きであって実は商売のためであったとみられる。このように氏長は、連歌を単なる嗜みとしてでなく経済活動にも利用していたのである。ちなみにこの長野家では、慶長五年（一六〇〇）一月に会津城主上杉景勝が家臣や時衆の僧とともに「賤何船連歌」と題して詠んだ連歌一巻を所蔵している。

と言及されていたが、その所在は長らく不明であり、翻刻もなされてこなかった。

図版１　端作（埼玉県立文書館蔵長野家文書）

図版２　初折ウラ

図版３　句上

※転載禁止

だが、このたび調査でその所在が判明した。この連歌が興行された慶長五年正月は、そのわずか四ヶ月後に、景勝の家宰直江兼続が、家康による上洛の命に異議を申し立てたことに端を発する「直江状」が作成されたとされる年でもある。さらに家康による上杉氏征伐（会津征伐）を契機に、関ヶ原の合戦が勃発する年でもある。

なお、当該連歌と同年に興行された和漢聯句があったとされるが[3]、現在その所在は不明である。

以上、興行時期及び百韻を完備する連歌懐紙は、資料的価値の点からも極めて意義があり、ここに本文を掲げ、かつ注釈を施した。

一、書誌及び連衆

まず書誌を記す。埼玉県立文書館蔵長野家文書「賦何船連歌」（成田下総守より喜三江被下候）。巻子装。金茶色地牡丹唐草文様。一軸。外題なし。巻緒（紫色）に旧蔵者独自の整理番号と思しき「二五〇」の記号を記した紙片が貼付。一紙は縦一八・三糎、横四一三・六糎（一オ　五二糎、一ウ　五一・六糎、二オ　五一・六糎、二ウ　五二糎、三オ　五二糎、三ウ　五一・八糎、四オ　五一・二糎、四ウ　二四・四　句上げ二七糎）で計九紙。字高一六糎前後。斐楮。無地。裏打補修あり。擦り消し痕間々あり。各紙に水引きで綴じた際の二ツ穴の跡あり。第九八句、第九九句、第百句は一部または全てが摩滅し判読不能な箇所がある。本文とは別筆で後世のものと思しき貼紙（縦一五・九糎、横一五・四糎）が裏見返しの金箔上に重ね貼りされ、「此一巻は上杉景勝公始夫々連／歌連中連歌有之候節之書物／之由候ニ而慶長天正之比連歌流／行ニ而候別而成田下総守連歌相好／候ニ付此一巻所持之品とそ江被下候故／所持罷在候由候」と当該連歌の伝来過程が記される。

次に本百韻の連衆の略歴[4]と句数を句上に従い掲げる。懐紙に記される名を挙げた後、（　）内に句数を示した。

《連衆》

・**景勝**（一）：上杉景勝。豊臣家五大老の一人。慶長三年正月より会津に国替え。同五年九月、上杉討伐を掲げる徳川家康と交戦。この時、四十五歳。

・**眼阿**（八）：未詳。時宗の僧か。

・**富隆**（十一）：八王子富隆。民部少輔。上杉家の家臣か。慶長六年十二月十九日直江主催の和漢聯句に参加。

・**隠其**（十）：越後称念寺隠居。元越後府中時宗寺院の住職。

・**覚阿**（九）：文禄三年の「懐旧百韻」（東京帝国図書館本）に忍城主成田氏長、連歌師里村紹巴、直江の実弟大国実頼らと共に名を連ねる。

・**其阿**（九）：会津若松東明寺其阿弥。時宗の僧。翌六年十二月十九日の和漢聯句、同七年の続歌百首で和歌を詠む。

・**忠廣**（九）：蔵田忠廣。惣左衛門。上杉家の家臣か。

・**氏秀**（十）：来次氏秀。出雲守。直江兼続の家臣。出羽国人、庄内羽黒山神職家の出身。はじめ最上氏に仕える。天正十九年庄内藤島一揆討伐の折に景勝に帰服。文禄二年の直江主催の漢和聯句で執筆を務め、慶長六年十月の和漢聯句に参会。

・**綱忠**（八）：楡井綱忠。織部。信濃にあった楡井氏は仲共が越

後守護房定に随い、その後謙信の旗下に属す。綱忠の代に景勝に従い会津から米沢へ移った。

・**方信**（九）：未詳。なお積翠寺蔵「寛永十三年八月十八日賦何路連歌」に十三句出詠。米沢の郷土史家、今井清見氏の『直江筋書』[5]によれば、会津若松で興行された慶長四年十月二十五日連歌に「方重」がおり、その関係者の可能性が高い。

・**元儀**（七）：未詳。方信と同じ連歌会に参じた。

・**泰正**（八）：未詳。成田氏の関係者か。

・**行重**（一）：未詳。執筆か。

連衆は、明確な事績が追えない者も多いが、いずれにしても天正期以降、上杉家内外で催されてきた会に、度々参加してきた人物を中心に構成される。例えば、隠其は、同六年十二月十九日の直江主催の和漢聯句にも参会している。また、忠廣、綱忠、富隆、其阿は、慶長七年に上杉家の家臣らの和歌と漢詩が続がれた「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」にも名を連ねる。なお、他の上杉家関連の連歌・和漢聯句会に比して眼阿、隠其、覚阿、其阿など、時宗僧の参会が目立つ。

二、翻刻

《凡例》

・原本は一句を二行書きにするが、一行書きに改めた。

・句頭に通し番号を付し、通行の字体に改めた。

・摩滅により判読不能な箇所は□で示し、残画から推定される文字は、〔　〕で右傍に示した。

・紙移りは、連歌懐紙における通用の名称を用い『　』（初折オ）』のように示した。

《翻刻》

慶長五年正月廿一日

賦何船連歌

1 梅か香は空にかすめる春日哉　景勝
2 ふるも長閑にはるゝ雨雲　眼阿
3 鶯の古巣にかへるこゑたてゝ　富隆
4 はつほとゝきすきくもめつらし　隠其
5 夜ふかくもさむるかりねの夢は惜　覚阿
6 ふきかへけりな月のした風　其阿
7 鐘の音ほのかなりしも冷しみ　忠広
8 くれ行秋の霜払ふめり　氏秀

『（初折オ）

9 刈のこす山田のすゝきうらかれて　綱忠
10 あらはにつゝく一むらのみち　方信
11 舟よせて旅のやとりや急らむ　元儀
12 いり日をひたすあとのしらなみ　泰正
13 鷺の立洲﨑をちかみ水はれて　行重
14 風のをとする岩かねのまつ　富隆
15 越て行尾上やまたき時雨らん　眼阿
16 かけさむくなる月のあけかた　覚阿
17 長き夜をうちも侘たる麻衣　隠其
18 きりの雫そ板まもりぬる　忠広

19 寺もたゝ穐は軒はの朽そひて　其阿
20 色にいつるもうきしのふ草　綱忠
21 花にたに問人あらぬやもめ住　氏秀
22 あやなくくらす春のさひしさ　元儀

」（初折ウ）

23 さすらふる袖にうらやむかへる雁　方信
24 なをおもはるゝあとの古郷　眼阿
25 みえつくも夢をし風やさそふらん　泰政
26 ものかなしきは老のあかつき　其阿
27 伴ふもなかはゝあらすなれる世に　富隆
28 身はいつまてかみやつかへまし　氏秀
29 神かきにしはふくすゑの翁さひ　覚阿
30 くれぬる月に袖なとかめそ　忠広
31 兼ことの露のよすかを頼みにて　元儀
32 とひこぬとてもうとからぬ秋　方信
33 思ひとり人やりならすすむ山に　綱忠
34 引やそま木もをのかみち〳〵　泰政
35 小車のをともはるかにとゝろきて　氏秀
36 舟は大井の河つらのなみ　富隆

」（二折オ）

37 重れる落葉やなかれあへさらん　方信
38 むら雨きほふ岩のしたたり　覚阿
39 結ひぬる草の庵りの袖ぬれて　其阿
40 むかしをおもふゆふへ明ほの　氏秀
41 春秋のあはれを哥に書つらね　忠広
42 さけのむしろにくるゝ日はおし　綱忠
43 みたれぬる舞のいりあやたゝならて　眼阿
44 こてふのやとる露のむら竹　泰正
45 花ちれはつらきあらしも吹すさひ　富隆
46 雲にかすみのたちおほふ山　忠広
47 葛城や分行すゑはみちもなし　覚阿
48 ありあけなれや月のしら雪　元儀
49 夏の夜はまた宵なから更〳〵て　隠其
50 まつにほと時過て啼声　富隆

」（二折ウ）

51 難面をうらみはてぬる物思ひ　氏秀
52 かひまみしより露もわすれす　元儀
53 手折はやうへ置小萩をみなへし　忠広
54 あきのかり場をかへるとりしは　隠其
55 身にしめてかはすこと葉や馬の上　其阿
56 月にそめくりあへる旅人　方信
57 出てこし都の空ははるかにて　富隆
58 山より山のおくのかくれ家　覚阿
59 雲水のなかれをとするうす煙　泰正
60 松の木のまにおち瀧つなみ　氏秀
61 五月雨はいつを限りと晴さらん　綱忠
62 かたへくつるゝ小田のなはて路　富隆
63 里とをく住しとはかり暮初て　隠其
64 竹一むらのなひく鳥かね　眼阿

」（三折オ）

65 しら露とみる〳〵まかひ置霜に　方信
66 入かたはなを月のさやけさ　忠広
67 漕かへる袖ひややかのみなと舟　氏秀
68 をとあらましき奥津しほ風　其阿
69 松ならふ天のはしたて幽にて　元儀
70 ゆく〳〵くるゝ真砂ちのすゑ　隠其
71 やつしぬる姿もしるきまへ渡り　富隆
72 たれにおもひをふかくなしけん　眼阿
73 たらちねのあはするえにしそむかれて覚阿
74 さためなきこそうき心なれ　方信
75 ちりて又咲もたのまぬ花の陰　隠其
76 こすゑに残る藤のあはれさ　泰正
77 住すてしあともさなから春を経て　其阿
78 むすふ古井の水そぬるめる　綱忠
」（三折ウ）

79 おこなへる気色も年もあらたまり　方信
80 ゆつりをうくる國のたゝしさ　氏秀
81 善悪も学ひぬるこそ賢けれ　眼阿
82 みぬ人こもる閨そゆかしき　富隆
83 たきしむる衣のをとなひかほりきて　泰正
84 うしろめたきはとひすつる跡　隠其
85 化なるは誰より又も契らし　覚阿
86 あるかなきかのみちの一すち　其阿
87 夏草は茂るをまゝの野へにして　綱忠
88 くれてほたるのとひまかふ空　忠広

89 海人の住里あらはるゝともす火に　富隆
90 月は磯屋のすきまをもとふ　泰正
91 秋風や目さましかちに吹ぬらん　隠其
92 笛のとをねも露にしめれり　元儀
」（名残折オ）

93 草かりの零のしたみち分迷ひ　氏秀
94 ひろふもむしはこゝにかしこに　隠其
95 色鳥や日影におりてあさるらむ　忠広
96 きえものこらぬ春のあさ霜　其阿
97 外面より折きて花をさすかめに　方信
98 仏のわかれとひ□□る袖　覚阿
99 「　」　眼阿
100 をと絶□□吹「　」　綱忠
」（名残折ウ）

景勝　一句
眼阿　八　方信　九
富隆　十一　元儀　七
隠其　十　泰正　八
覚阿　九　行重　一
其阿　九
忠広　九
氏秀　十
綱忠　八

三、注釈

翻刻は、各句に通し番号を打ち、濁点を付さない形で示したが、注釈においては、私に濁点及び振仮名を施し、作者を記した。まず前句との関係を寄合語、句意の点から説明した後、一句の中で使用される語句に関する注を和歌、連歌の用例を引用し適宜記した。必要あれば、考察もここに記した。末尾には、季節とその季を認定した語を（　）内に記した。

1　梅が香は空にかすめる春日哉　　景勝

「空に」は、「梅か香」が空に満ちていることと、霞が空に立っていることの二句にかかる。「空はかすみ梅はにほひて物ごとに世は春になる色ぞのどけき」（沙玉集・三一二）。「春日」は、日の長い春の日。「さきにけりいまや匂をかすが山みかさののべの梅のした風」（宝治百首・二五五・頼氏）のように、地名の「かすが」を掛け、大和国の郷名或いは春日神社を想定するが、ここは上杉家の家臣が連衆にいること、当主の景勝が詠む発句であることを鑑み、上杉家の故郷である春日山を意識させるか。一句は、梅の香りは空に満ち、空に立つ霞は春の日をぼんやりとさせているよ、と詠む。春1（梅）。

2　ふるも長閑にはるゝ雨雲　　眼阿

前句の「空」に「雨雲」で応じた。「風まぜに空にただよふあま雲の晴るる時なき五月雨のころ」（新明題集・一三九九・隆貞）。また、「春日」に「長閑」。「春の日ののどかに見ゆる春日野にふる里人もわかなつむなり」（為家集・九）など。降っても日がやわらかく照って晴れる雨雲、とゆったりとした春の空の情景を詠む。春2（長閑）。

3　鶯の古巣にかへるこゑたてゝ　　富隆

前句で雨が晴れた空を飛んで古巣に帰っていく鶯を付けた。「朝日かげのどかにさして春日なるみかさの杜に鶯ぞ鳴く」（為家五社百首・二五）。鶯が鳴き声を立てて古巣に帰っていく。鶯の声で春が来たことを知る。春3（鶯）。

4　はつほとゝぎすきくもめづらし　　隠其

前句の「こゑたて」る主を鶯から時鳥に読み換えて付けた。「鶯→郭公」「郭公→鳴ふるす」（合璧集）。「鶯之生卵乃中尓（ウグヒスノ　カヒゴノナカニ）霍公鳥（ホトトギス）独所生而（ヒトリウマレテ）己父尓（サガチチニ）似而者不鳴（ニテハナカズ）　己母尓（サガハハニ）似而者不鳴（ニテハナカズ）宇能花乃（ウノハナノ）開有野辺従（サケルノヘヨリ）飛翻（トビカヘリ）（下略）」（万葉集・雑歌・詠霍公鳥一首并短歌・一七五七・詠み人知らず）。「はつほとゝきす」は、「鶯は帰し谷の古巣出て都にいそげはつほとゝきす」（為広詠草・漸待郭公・七六）。初時鳥の鳴き声を耳にするのも、新鮮で心ひかれる。春4（ほとゝきす）。

5　夜ふかくもさむるかりねの夢は惜　　覚阿

「郭公→ね覚」（合璧集）。「も」は順接の意。「蘆辺より雲居をさして行く雁のいや遠ざかる我が身悲しも」（古今集・恋・八一九・詠み人知らず）。一句は、夜が更けて、目覚めてしまう仮寝の夢は名残惜しい。雑。

6　ふきかへけりな月のした風　　其阿

前句の「かりね」を旅寝ととり、目が覚めたのは草枕をしたところに風が吹き返してきたからだ、と付けた。また、「かりね」と「月」は縁がある。「草枕かりねの夢にいる物は出でしみやこの有明の月」（拾玉集・三〇四六）。「ふきかへ」は、一度静まった風が逆方向から吹きもどすこと。「吹き返す東風のかへしは身にしみき都の花のしるべと思ふに」（後拾遺集・雑・一一三四・康資王母）、「衣手の森の下風吹きかへてさむきせみなく秋は来にけり」（夫木抄・秋・三八八三・頼氏）。一句は、吹き戻してきたのだな、月下に吹く風が。秋1（月）。

7　鐘の音ほのかなりしも冷しみ　　忠広

前句の「した風」と「月」の光が「冷しみ」であると受けた。「すさましみみる人もなきにはのおもにひとりさしゐる冬の夜の月」（伏見院詠草・一四七）。前句の「した風」のために消え入りそうな鐘の音がわずかに聞こえてくるのも、秋のひややかさを一層感じさせると詠む。鐘の音が別の音に遮られてわずかにしか聞こえないと詠む歌に「かねの音も窓うつ雨にほのかにて枕にふかき長きよのやみ」（壬二集・三〇五五）。秋2（冷しみ）。

8　くれ行秋の霜払ふめり　　氏秀

前句の「鐘」に降った「霜」を誰かが払っているのだろう、と思い遣る句を付けた。「鐘」と「霜」（合璧集）。「秋くれてあはれつきにしかねのおとの霜にこたふる冬はきにけり」（千五百番歌合・一六六四・讃岐）。「秋の霜」は、「つもりぬる我がよもぎふの秋の霜ふり行く庭の月ぞさびしき」（宝治百首・一七三二・忠定）など、秋が一層深まるさまを表現。一句は、深まっていく秋に降りた霜を払うのだろう。秋3（秋）。

9　刈のこす山田のすゝきうらがれて　　綱忠

前句で降りた霜によって、秋の象徴である薄も枯れた、と秋がより一層深まった様を付けた。「一もとの薄のかれほ霜折れて草なき野べとなれる冬かな」（草根集・寒草纔残・五一五四）。「霜→草のうら枯」（合璧集）。刈り残されている山裾の田に生える薄が枯れて。秋4（すゝき）。

10　あらはにつゞく一むらのみち　　方信

薄が枯れたことで、隠れていた道が村まで続いているさまがはっきりと見えるようになった、と付けた。「一むら」は、「産衣」に「居所の心過て、又竹一村など有べし。以上二也」とあり、当該句では居所の意と解した。前句の「田」がある場所には村が近くにあり、その村まで道が続くさまを詠むか。「かり残す門田のいなばうちなびき一村そよぐ秋風の声」（壬二集・一一三四）。雑。

11　舟よせて旅のやどりや急らむ　　元儀

前句で露わになった村へ続く道をみて、舟を岸辺に寄せて、旅先の宿からの出立を急ぐのだろう。「やどりとるさとやはるけき此夕しらぬ山路をいそぐ旅人」（為村集・二〇一五）、「い

でやらぬ旅のやどりの霜ふかみ／をぶねにかゝるあしのしたおれ」（三島千句第二・八）。雑。羇旅。

12　いり日をひたすあとのしらなみ　　泰正

前句で旅人が宿りを急いだ理由を、日が海に沈んだためと付けた。「浪の上に入日の影はなるみがたさす夕しほにいそぐ旅人」（経氏集・三五六）。日が海に沈むさまが、まるで白波が日を浸したかのようだと詠む連歌に、「山より遠の雲ぞ暮れゆく／紅の入日をひたす波の上」（永正十花千句第七〔早大伊地知本〕・七一・聴雪）。一句は、落ちる日を水のなかにつからせた後に立つ白波、と詠む。雑。

13　鷺の立洲崎をちかみ水はれて　　行重

前句の「しらなみ」が立つ水辺の具体的な描写で付けた。「はますゑのゆきあひの洲崎しほみてば入江へだてぬ興つしら波」（信実集・二一一）。「水はれて」は、水面に何も映らず、波も立たない穏やかなさまのことか。勅撰集には求め難い表現であるが、「鷺のとぶ川辺を遠み水晴れて入日に過ぐるあきのむら雨」（雪玉集・二二三九）、「水はれてきりに月すむあしたかな」（大発句帳・五〇四三）などが参考となる。洲の先端が水中から出た「洲崎」には鳥が群れる。「おきつしほ入江はなぎて夕浪もたたぬ洲崎にたづぞむれゐる」（草根集・九〇〇八）。鷺が飛び立つ洲崎は近く、水は穏やかで。雑。

14　風のをとする岩がねのまつ　　富隆

前句の「洲崎」に生える「まつ」を付けた。「から崎や夕なみ千鳥ひとつ立つ洲崎の松も友なしにして」（心敬集・一五八）。岩に近接するように松が生えている。「岩がねの枕はさしもなれにしになにおどろかす松のあらしぞ」（続千載集・羇旅・八五五・土御門院）、「契置きて幾世をへぬる友ならんむす苔青き岩がねの松」（新明題集・四一一七・幸仁）。風の音を響かせているのは、岩の側に生える松である。松が風で揺れて擦れる音は、風の音なのだな。雑。

15　越て行尾上やまだき時雨らん　　眼阿

前句の松風の音を時雨の音に取りなして付けた。「時雨→松風」（合璧集）。前句の風が時雨を降らす雲を誘ってきた。松の音は時雨のそれと聞き分け難いことを詠む和歌に「風のおとにわきぞかねまし松がねのまくらにもらぬ時雨なりせば」（千載集・羇旅・五二五・実房）。松風が吹くと時雨が想定される和歌に、「そでぬらすをじまがいそのとまりかな松かぜさむみ時雨ふるなり」（続古今集・九〇四・俊成）。これから越えようとする峰の上では、早くも時雨が降っているのだろう。雑。

16　かげさむくなる月のあけがた　　覚阿

前句の「時雨」が降ってきたから、体感的にも寒くなり、その中で浮かぶ月の光も寒々しい、と視覚的に感じる寒さを付けた。「秋のよのふかきあはれは有明の月みしよりぞしぐれそめにし」（新後拾遺・秋下・四一四・俊成）。「影寒き月はくもらで出でにけりふらぬ時雨や軒の松かぜ」（藤葉集・三二五・有

忠）、「影寒く嵐にすめるよはの月雲なき空も秋にかはりて」（新明題集・冬・二八一〇・資茂）。一句は、明け方の月の光は冷たく寒々しくなる。秋1（月）。

17　長き夜をうちも侘たる麻衣　　隠其

前句の「月」から、月光の下で衣を打つ秋の長夜のさまを付けた。「あらしふくとほ山がつのあさ衣ころも夜さむの月にうつなり」（新勅撰集・秋下・三二一・真昭法師）、「みるままにかげさむくなるあけがたの月にかこちてうつ衣かな」（俊光集・三二〇）。秋の長夜を麻衣を打って憂いながら過ごす。秋2（長き夜）。

18　きりの雫ぞ板まもりぬる　　忠広

前句の「麻衣」に落ちる雫を付けた。「そでもさながら野べの色〳〵／から衣霧の雫にしほれきて」（石山四吟千句第十〔九大支子文庫本〕・九・公条）。板間から漏れ落ちる雫を詠む連歌に、「時雨しぐれて月は有明／板間より露のしづくのさむしろに」（羽柴千句第五・八七）など。一句は、霧が雫となったものが、板間から漏れ落ちてくる。秋3（きり）。

19　寺もたゞ穐は軒ばの朽そひて　　其阿

前句の「雫」が軒端を朽ちさせる、と付けた。「霜に残らぬつたの葉の色／いはかねの雫は秋のなほそひて」（元亀二年千句第三・七七）。「かすかにも麻の狭衣うつ里に／軒端の秋の霜深き暮れ」（宮島千句第六・二〇）。（霧の雫は）寺でもただ秋は軒端を朽ちさせて。秋4（穐）。

20　色にいづるもうきしのぶ草　　綱忠

前句の秋の気配、風情を感ずる具体的な景物「しのぶ草」を付けた。「わたくしの宿はあるとも恨むなよ／しのぶ草おふる軒のかげ」（葉守千句第九・八二・宗祇）。色に出てしまうのもつらい思い出のよすがとなるしのぶ草である。雑。

21　花にだに問人あらぬやもめ住　　氏秀

前句の「うき」理由を付けた。前句の笆を「やもめ住」の人が住む家のそれと定めた。「籬→草花」（合璧集）。前句「しのふ草」がわすれな草の異名であることから、人から忘れられた独り住まいの寂しさも含意するか。「別れしあとの憂きねやのうち／忘られてこの世なからのやもめ住み」（五吟一日千句第十・二一）、「春の夜のねぐらの鳥たち別れ／わびしきものはやもめ住みなり」（天文廿四年梅千句第八・五二）。花でさえも一緒に愛でる人がいない、独り住まいであるよ。春1（花）。

22　あやなくくらす春のさびしさ　　元儀

前句の「やもめ住」を受けて、その人が春の日を過ごすことのむなしさ、さびしさを付けた。「身にかへてあやなく花を惜むかなないけらばのちのはるもこそあれ」（拾遺集・春・五四・長能）。（独り住まいで訪う人もなく）むなしく過ごす春の心細さである。春2（春）。

23　さすらふる袖にうらやむかへる雁　　方信

前句の「さびしさ」を、寄る辺なき旅人の寂しい姿で受けた。人が空を飛ぶ鳥に「うらやむ」感情を抱くことを詠む和歌に「あれはてて春の色なきふるさとにうらやむ鳥ぞつばさ雙ぶる」（拾遺愚草・一六一一）。流浪する人の袖に羨ましいと思わせる北へ帰る雁。春3（雁）。

24　なをおもはるゝあとの古郷　　眼阿

「帰雁→故郷」（合璧集）。当該句との類相句に「思ふも遠しあとの古郷／旅枕草と浪とに隔て来て」（竹林抄・九六七・能阿[6]）。（北へ帰る雁をみて）いっそう思いが募る、後方の故郷。雑。

25　みえつくも夢をし風やさそふらん　　泰政

前句で「古郷」を想うばかりに、草枕の「夢」にその光景を見たと付けた。和歌に「おのづからふる郷人もおもひいでば旅ねにかよふ夢やみゆらん」（新後撰集・羇旅・六〇二・平親清女妹）など。「みえつくも」の和歌・連歌例に求め難いが見尽くす、の意か。見尽くした夢を風がさそうのだろう。雑。

26　ものがなしきは老のあかつき　　其阿

前句の「夢」は、年老いた人がみると、朝方にはやく覚めてしまうと付けた。「老眠早覚常残夜、病力先衰不待年」（和漢朗詠集・七二四・白居易）。「夜るの鶴の思ひに袖もせきかねて／目さますのみの老のあかつき」（伊庭千句第一・一四・聴雪）。なんとなく悲しいのは、老いの明け方である。雑。

27　伴ふもなかばゝあらずなれる世に　　富隆

前句の「あかつき」を「月」に取りなして、「伴ふ」と付けたか。「春の花月に開きあふ年まれに友なふ人のおほきよはかな」（草根集・一四八六）。一緒にいることも中途半端ではなくなった仲で。雑、恋1（句意）。

28　身はいつまでかみやづかへまし　　氏秀

前句で親しい関係となった相手は「みやづかへ」をした人で、その人からいつまで寵愛されるのだろうと憂慮する句を付けた。当該句と類想的な連歌に「あはれゆかりにあふもはづかし／いつまでかしもがしもなる宮仕へ」（元和六年九月二十日・七三）我が身は、いつまで宮仕えをするのだろう。雑、恋2（句意）。

29　神がきにしばふくすゑの翁さび　　覚阿

前句の「宮仕え」を神社で神事の勤めをする宮司に取りなして付けた。「翁さび」は、老人のことで連歌に「みやはとがめぬ物おもふいろ／あすをこそ我身にしらぬ翁さび」（顕証院会千句第六・八七・専順）。神垣に柴を葺くほどの年月が経ち老人となった。雑。

30　くれぬる月に袖なとがめそ　　忠広

前句の「翁さび」から『伊勢物語』一一四段の「翁さび人なとがめそ狩衣けふばかりとぞ鶴も鳴くなる」に基づいた付け。「翁→人なとがめそ」（合璧集）。暮れる月の下で人は咎めないでおくれ。秋1（月）。

31　兼ごとの露のよすがを頼みにて　元儀

前句の「月」を見ている人の「袖」に「露」が置く。「秋はつるさよふけがたの月みれば袖ものこらず露ぞおきける」（新古今集・秋下・四八六・道信）。「兼ごと」は、前もって言っておく約束の言葉。「昔せし我がかねごとの悲しきはいかに契りし名残なるらんむ」（後撰集・恋・七一〇・定文）。以前からの約束の言葉は露のようにはかないものだが唯一のよすがとして頼みにして。秋2（露）、恋（兼ごと）。

32　とひこぬとてもうとからぬ秋　方信

前句の「兼ごと」の具体的な内容を付け、訪れはなくても、あなたとの関係は深いのだと相手に関係の継続を頼みにさせる言葉を付けた。当該句のように訪れはないことを恨んだり、憂慮したりすることがない連歌に、「岡のべの松の葉ごしの峰の庵／とひこぬもたゞ恨とはせじ」（永禄石山千句第九〔京大平松文庫本〕・六六・為九）。訪れがなくても、浅い仲ではなく飽くことはない秋である。秋3（秋）、恋（とひ）。

33　思ひとり人やりならずすむ山に　綱忠

前句の「とひこぬ」を受けて、誰も訪れることのない「山」に住むと付けた。「思ひとり」は、悟り決心すること。和歌に「うきものと思ひとりてもこりずまに又ながめつる秋のゆふぐれ」（続後撰集・秋上・二七五・雅成）、連歌に「かりいほつくりひとりある人／おもひとりて世をはなるゝはうらやまし」（聖廟千句第二・一三）[7]。「人やりならす」は、自分の意思で行動すること。「世もかこたれぬたひのかなしさ／ふるさとを人やりならすすみすてゝ」（新撰菟玖波集・羇旅・二一三五・多々良政弘）。決心して、誰かに言われたのではなく、自分の意思で山に住む。雑。

34　引やそま木もをのがみち〳〵　泰政

前句の「山」に「人やりならずすむ」人を、山に生えるそま木を引いて過ごす樵などを想定して付けたか。「杣→山」（合璧集）。「ひく人もなくてくちゆくことのはそ色にいつみの杣木ともなき」（貞敦親王御詠・三八四）。杣木を引いたのだろうか、人に引いて運ばれる際に地面についた跡が、それぞれの道となって残っている。雑。

35　小車のをともはるかにとゞろきて　氏秀

前句の「引」、「みち」から「車」が導かれた。「とくのりの声にさめぬる秋の夢／鹿も車をひくとこそきけ」（文明十四年万句第六千句第六・八六）。前句の「みち」を車が通るそれに取りなした。牛車の音も遠くに響いて。雑。

36　舟は大井の河つらのなみ　富隆

前句で「とゞろ」いたものを当該句では、河の水の流れに取りなして付けた。和歌に「山たかみとどろきおつるおとはしてかすむ岩せのたきの白浪」（為尹千首・二二六）。前句の陸上の乗り物に対して、水上のそれを付けた。「せりかはや絶えぬみゆきを伝ふらむ／舟はおほゐの波に浮かへり」（慶長年間百韻〔慶長十一年一月三日〕・八六）。舟は大井川の川辺に立つ波の上を進む。雑。

37　重れる落葉やながれあへざらん　　方信

前句の大井の川面に浮ぶ落葉を付けた。「舟↓落葉」（合璧集）。重なり落ちている葉は流れることができないのだろう。冬1（落葉）。

38　むら雨きほふ岩のしたたり　　覚阿

前句の「ながれあへざらん」に対して、「したたり」と付けて、水が流動するさまを付けた。一句は、村雨が岩の雫が滴るのよりも先に落ちようとするさま。連歌に「のどかなる嵐の雲や残るらむ／舟路の末にきほふ村雨」（初瀬千句第四・一六・宗砌）。雨粒が先を争うように岩から滴りおちる。雑。

39　結びぬる草の庵りの袖ぬれて　　其阿

前句の「むら雨」が、結んだ草の庵から漏れて、宿をとる人の袖は濡れたと付けた。和歌に、「むらさめのもるや山田のかりやかたあらはばしばし袖もほさまし」（宝治百首・三七二五・為家）など。結んだ草の庵では、袖が濡れて。雑、羇旅。

40　むかしをおもふゆふべ明ぼの　　氏秀

前句の「草の庵り」の中で、昔のことに想いを馳せる様子を付けた。「むかしおもふくさのいほりのよるの雨に涙なそへそ山時鳥」（新古今集・夏・二〇一・俊成）。一句は、夕暮時にも明け方にも昔に想いを馳せる、と詠む。雑。

41　春秋のあはれを哥に書つらね　　忠広

前句の「ゆふべ明ぼの」と一日の時間の流れを詠む句に対して、それよりも大きな「春秋」という一年間の時間軸を付けた。「あづま路や春たつけふの朝霞／しなかはりたる春秋の歌」（宗砌発句並付句抜書・二二八三）。一年の情趣を歌に詠んで書き連ねる。雑。

42　さけのむしろにくるゝ日はおし　　綱忠

前句で「哥を書きつらね」る場を宴席と見て付けた。「年みてるをぞいのるゆく末／よむ哥はあかぬなさけのゑひ心ち」（慶長年間百韻〔慶長四年五月十日〕・三七）など。酒を飲む筵に暮れていく日は名残りおしい。雑。

43　みだれぬる舞のいりあやたゞならで　　眼阿

前句の「さけのむしろ」で披露される「舞」を付けた。「たをりそへたるつつじ山吹／永き日もいりあやしたふまどゐして」（紹巴亡父追善千句第八・三）。乱れた舞いの退きは、素晴らしく並々ではなく。雑。

44　こてふのやどる露のむら竹　　泰正

前句の「舞」から舞うように飛ぶ「こてふ」を付けた。「野べの胡蝶ぞちりほひて飛／春の日の舞の入綾のどかにて」（初瀬千句第七・九九・宗砌）。「舞→こてふ」（合璧集）。胡蝶がとどまる（仮のすみか）露の下りた竹の一群。春1（こてふ）。

45　花ちればつらきあらしも吹すさび　　富隆

前句の竹に置いた「露」は「あらし」によって吹き落ちてしまうと付けた。「嵐ふく野原の草の露ながらむすぶかりねの夢ぞはかなき」（新後拾遺集・羇旅・八八九・法眼澄基）。なお、「吹すさび」には風が強まる意と弱まる意があるが、次句では風が弱まることで花が雲や霞のようにたちこめる意と読み替えたと考え、当該句では強まるの意で解した。花が散ると、薄情な（耐え難い）嵐も吹き荒れて。春2（花）。

46　雲にかすみのたちおほふ山　　忠広

前句で「あらし」によって吹き散らされた花がまるで、「雲」や「かすみ」のようにみえて、山を覆ってるかのようだと付けた。「くもやたつ霞やまがふ山ざくらはなよりほかも花と見ゆらむ」（新勅撰集・春上・七一・俊成）など。「嵐→山」（合璧集）。一句では、山に雲や霞が立つ実景を詠み、雲にさらに霞が立って山を覆う、となる。春3（かすみ）。

47　葛城や分行すゑはみちもなし　　覚阿

前句の山を具体的に葛城山と定めて付けた。「こえてくるみちもなきまでかづらきのたかまの山は雪ふりにけり」（為忠家後度百首・四五九）。分け進んで行く果てには道がない葛城山であるよ。雑。

48　ありあけなれや月のしら雪　　元儀

前句の「分行すゑ」の「みち」に積もった雪の様を詠む。雪の白さを有明の月の光のそれに見立てる和歌に「有明の月とみしまの白妙は雪の庭なる朝ぼらけかな」（新明題集・二七五四・後西院）。有明の月の光の白さなのだろうかと思うほどの白い雪。冬1（した雪）。

49　夏の夜はまだ宵ながら更〳〵て　　隠其

夏の夜が深まっていくと、有明の月が見える時間帯になると、前句に返る心である。「まつほどに夏の夜いたくふけぬればをしみもあへぬ山のはの月」（詞花集・夏・七七・道済）。夏の夜はまだ宵の口のままの明るいさで更けていって。夏1（夏）。

50　まつにほど時過て啼声　　富隆

前句の「更〳〵て」を受けて、夜がすっかり更けてしまうまで、待って聞こえる時鳥の鳴く声を付けた。「ほど時」には「時鳥」が掛けられる。「ほととぎすまつはひさしき夏のよをねぬにあけぬと誰かいひけん」（千載集・夏・一四八・公通）。待つほどに時が過ぎてから聞こえる時鳥の啼き声。雑。

51　難面（つれなさ）をうらみはてぬる物思ひ　氏秀

前句で身が老いてしまいそうなくらい長い時間、恋人を「まつ」女性が、相手の素っ気ない態度に恨みを抱く句を付けた。「こゝらの年に逢へるうれしさ／つれなさを半は恨み思ひわび」（竹林抄・九二〇・専順）。冷淡な態度を怨んだ末に思い悩む。雑、恋1（うらみ）。

52　かひまみしより露もわすれず　元儀

前句で、男性のつれなさに歎息する女性の心を詠んだ句に対して、当該句は、あなたのことを一目見た頃からずっと思っていたという男性の心を付けた。あの人をのぞき見た時から片時も忘れることはない。秋1（露）、恋2（かひまみ）。

53　手折（たおら）ばやうへ置小萩をみなへし　忠広

前句の「露」を小萩と女郎花に置くものに取りなし、露がついたままの秋花を手折りたいものだ、と付けた。「露→置」（合壁集）。「あさまだきたをらでを見むはぎの花うはばのつゆのこぼれもぞする」（新勅撰集・秋上・二三九・師時）。手折りたいものだ、植えてある小萩や女郎花を。秋2（小萩）。

54　あきのかり場をかへるとりしば　隠其

前句の小萩や女郎花の枝を「鳥柴」の木に取りなした。「とりしば」は鳥柴のこと。鷹狩りの獲物を贈る際に鳥を結びつける木。「つれもなき人のこころをとりしばにこがねのきぎすつけえてしかな」（夫木抄・一八〇二・仲正）。獲物を付けた鳥柴とともに秋の狩り場をあとにする。秋3（あき）。

55　身にしめてかはすこと葉や馬の上　其阿

前句の「あき」の語を受けて「身にしめて」と応じた。「泪ぞ袖の色かはり行く／秋深き月と風とを身に入て」（浅間千句第三〔国文研福井本〕・二五）。しみじみと身に染みて、言葉を交わす馬上である。秋4（身にしめ）。

56　月にぞめぐりあへる旅人　方信

前句の「身にし」む対象を「月」と定め、「かはすこと葉」は当該句では旅人同士が交わしたものとなる。月の下でこそ巡り会うことができる旅人。秋5（月）。

57　出でこし都の空ははるかにて　富隆

前句の「旅人」が出立した場所を「出てこし都」と受けた。旅人が遥か彼方になってしまった都を思い遣る気持ちである。「たえずぞ誰も物はかなしき／ひきつれて出こし都遠ざかり」（伊庭千句第八・八九・宗碩）。また、「月」が姿を現すことを「出でこし」で応じる。「月→都」（合壁集）。出立してきた都の空は遥かかなたにあって。雑。

58　山より山のおくのかくれ家　覚阿

前句で都を「出でこし」人が目指した場所を付けた。山の深奥に人が踏み入ることを詠む和歌に、「まだしらぬ山よりやまにうつりきぬあとなき雲のあとをたづねて」（続後撰集・羇

旅・一三一三・良経）。山のさらにその山の奥の隠れ家である。雑。

59　雲水のながれをとするうす煙　　泰正

人が隠れ住むような山奥を受けて、そこに立ち込める「うす煙」を付けた。「谷よりのぼる雲のしたみち／身をかくす庵につらきうす煙」（河越千句第七・二七・修茂）。煙が視界を遮っている中、雲や水が流れる音だけは聞こえる状況を詠む。「雲→山」（合璧集）。薄煙の中で雲や水が流れる音がする。雑。

60　松の木のまにおち瀧つなみ　　氏秀

前句の水の音を辿っていくと、松の木の間から瀧が見えたという展開。「けぶりにこもるみなかみの山／一むらのまつの木のまに滝落て」（大原野十花千句第四・二三・了弦）。「煙→松、水」（合璧集）。「時雨もや風にまがひてすぎつらむ／この葉たえだえおち瀧つ波」（紹巴亡父追善千句第七・一四）。松の木の間から落ちる瀧の波が見える。である。雑。

61　五月雨はいつを限りと晴ざらん　　綱忠

前句の木の間から見えたと思った瀧は、実は五月雨であったと付けた。「滝→雨」（合璧集）。「さぞなとおもふうつせみのこゑ／五月雨はこのまにたきのおちあひて」（永禄三年十一月十日・八一）。五月雨はいつを果てにして、止まないのだろうか。雑。

62　かたへくづるゝ小田のなはて路　　富隆

前句で降り続いた五月雨によって、小田のあぜ道がぬかるんで崩れるさまを付けた。あぜ道に限らず、雨が降った後には、土で出来た岸などの土地が崩れることを詠む連歌に「みよし野々吉野を花の所にて／岸もくづるゝ夕立のあと」（那智篭・二八八〇）。「なはて路」は「畷、田間道、奈八天」（和名抄）とあるように、田の間の道。小田のあぜ道の片側が崩れている。雑。

63　里とをく住しとばかり暮初て　　隠其

前句の「小田のなはて路」を通って、日が暮れ始めたので遠くにある里に帰る、と付けた。里から離れた場所に住んだところだけが暮れはじめて。雑。

64　竹一むらのなびく鳥がね　　眼阿

前句で日が沈みはじめた時に鳴く鳥を付けた。夕方、一叢の竹で鳥が鳴くさまを詠む連歌に「たれもや世々の親子なるらん／鳴鳥の林の竹にすをかけて」（紫野千句第十・四一・牧）。一叢の竹がなびき、そこから鳥の鳴き声が聞こえる。雑。

65　しら露とみる〳〵まがひ置霜に　　方信

前句の竹が風で揺れたことで、そこに置いていた露が落ち、霜かのように見まがうと付けた。「みる〳〵まかひ」とは、見ているうちに入り乱れるの意で、ここでは露かと見ていたものに、霜も混在してきたことを詠む。ある二つのものが入り乱れ

ることを詠む連歌に、「半天は風もなきたる朝月夜／霧にまがひて小雨涼しも」（石山四吟千句第十〔九大支子文庫〕・九二・紹巴）。白露と見ているうちに、入り乱れて霜も入り乱れて置く。秋1（露）。

66　入かたはなを月のさやけさ　　忠広

前句の「まがひ」を、霜の白さが月光のそれと見まがうものであるの意に取りなして付けた。「月→霜」（合璧集）。「まことゝたのむ一ふしはなし／竹に置霜こそ月にまがひけれ」（菟玖波集・冬・九七七・尊氏）。また、前句の「みる〳〵」と「月」が縁となって、月を見ているうちに「入かた」になるまでの時間的経過を含意するか。「月のもと見る〳〵いく夜かすむらむ／くさのまくらにとほざかるゆめ」（出陣千句第二〔東大国文蔵本〕・四）。月は沈むころになるとことにその姿がくっきりするものだ。秋2（月）。

67　漕かへる袖ひややかのみなと舟　　氏秀

前句の「月」から「ひややか」の語を導いた。「秋のほたるのほのかなるかげ／端居する袖ひや、かに月出て」（飯盛千句第六・十三・興久）など。また、前句の月が沈むころになったから舟を漕いで帰港すると付けた。「月→舟」（合璧集）。湊舟を漕いで帰る人の袖は冷え冷えとしている。秋3（ひややか）。

68　をとあらましき奥津しほ風　　其阿

前句の「舟」が受ける風の様を詠み、舟を漕ぐ人の袖が「ひややか」であった理由が明らかとなる。「奥津しほ風」が激しいことを詠む句に、「またふきたつは沖つしほ風／松原のあなたの里の夕けぶり」（菟玖波集・雑二・二五三〇・行阿法師）。沖を吹く潮風の音は荒々しい。雑。

69　松ならぶ天のはしだて幽にて　　元儀

前句で荒々しく吹く風によって天橋立の姿が消えてしまいそうだと付けた。また、前句の「をと」は、当該句では松風がたてる音になる。「神代にもいもせはありと聞ものを／松風さびし天のはしだて」（北畠家連歌合〔書陵部本〕・一七九・伝阿法師）。松が並び立つ天橋立の姿は消えてしまいそうで。雑。

70　ゆく〳〵くるゝ真砂ぢのすゑ　　隠其

前句の松が立ち並ぶ白い海岸線の路を付けた。「散るこそ波の玉柏なれ／真砂地にたてる松がね顕れて」（文安月千句第六・一一・専順）。「ゆく〳〵」は、前に進んで行くことで、和歌に「むさし野やあかず千種に花を分けばゆくゆく秋のはてもみてまし」（新明題集・一九五〇・宗量）、連歌に「舟よばふこの河ごしや遠からむ／行〳〵なをぞ道いそぎける」（文安雪千句第三・九八・有春）など。歩きながらも進む真砂地の果ての方が暮れていく。雑。

71　やつしぬる姿もしるきまへ渡り　　富隆

前句で日が暮れてから、女性のもとへ通う男性の姿を付けた。「袖もまぎれずただならぬ人／しのぶにや姿やつしてかよ

ふらむ」（園塵〔早大本〕・恋・九四〇）。目立たなく貧しい姿にしてもはっきりとわかる思い人の家の辺りをさまよい歩く。雑、恋1（まへ渡り）。

72　たれにおもひをふかくなしけん　　眼阿

前句で女性のもとへと姿を変えてまで熱心に通っている人物に対して、第三者が男性の心を思い遣る句を付けた。一体、誰に慕う気持ちを深くしていったのだろう。雑、恋2（おもひ）。

73　たらちねのあはするえにしそむかれて　　覚阿

親が取り決めた縁に背かれたのは、相手が誰か別の人を慕ったのだろうか、と前句に返る心である。「たれたひならぬ国〳〵の人／おもへともそむき〳〵の中はうし」（東山千句第十・四一・聴雪）。親が出会わせた縁に背を向けられて。雑、恋3（えにし）。

74　さだめなきこそうき心なれ　　方信

前句で縁に「そむかれ」た側の憂き心を付けた。「しぐれしそらの袖もひぬ比／定めなき契りのすゑを打侘て」（伊庭千句第十・二三・聴雪）。定まらない状況はつらい気持ちである。雑。

75　ちりて又咲もたのまぬ花の陰　　隠其

前句の「さだめなき」対象を儚く散って、咲くことを繰り返す花の様子と受けて付けた。「花→心」（合璧集）。「たそがれ時ぞやすらはれぬる／手折べき人まを憑む花のかげ」（老耳・一八五五）。散って、また咲いても期待はしない花の下である。春1（花）。

76　こずゑに残る藤のあはれさ　　泰正

前句の「花」が具体的に何であるか付けた。「藤→花のあたり」（合璧集）。『源氏物語』胡蝶に「ほかには盛りすぎたる桜も今さかりにほゝゑみ、廊をめぐれる藤の色も、こまやかにひらけゆきにけり」。梢に残っている藤の花の趣のあることよ。春2（藤）。

77　住すてしあともさながら春を経て　　其阿

誰かが住んで捨てた跡にも春はやってきて、梢に藤の花だけが残っている、とその趣を前句に返って求める心である。「ふぢばかまなに匂ふらんすみすてて野となる庭は誰かきてみん」（続千載集・秋上・三七九・前僧正道性）。住んで捨てた痕跡もそのまま変わらず春という季節を経て。春3（春）。

78　むすぶ古井の水ぞぬるめる　　綱忠

前句で到来した「春」によって、掬った水が温かくなっていると付けた。また、前句で住み捨てたところに変わらず残る井戸を詠む。「たえ〴〵になびく霞のあとさびて／古井の水をたれかむすばむ」（文明万句第三千句第四・八六）[8]。掬った古井戸の水は温かくなる。春4（ぬるむ）。

79　おこなへる暮も年もあらたまり　　方信

前句で「ぬるめり」と水が温かくなったのは、年が明けて春となり、寒さが和らいだから、付けた。「いろもかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける」（古今集・春上・五七・友則）。お勤めをする夕暮時も、年も新しくなり。春5（年あらたまり）。

80　ゆづりをうくる國のたゞしさ　　氏秀

前句の「あらたまり」を、年が改まるの意から、為政者が変わる意に取りなして付けた。連歌に、「さまかへばやもあらましにのみ／ゆづりてもしばしは国の後見に」（飯盛千句第六・四五・紹巴）。「ゆづり」は皇位継承の可能性もあるが、その場合「御」など敬意を表する言葉を伴う必要があろう。したがって、ここでは広く為政者の権力譲渡の意と解し、それが正しく行われて引継ぎを受けられることの世が平和であることの気持ちが含意されよう。「をみの衣の袖の数々／すめらきのゆづりをうくる世の始め」（元亀二年千句第九・五九）。一句は、その国の正しさというものは、為政者からの権利譲渡を受けられることに表れている。雑。

81　善悪（よしあし）も学びぬるこそ賢けれ　　眼阿

前句の「國」を受けて「善悪」を付けた。「只一ふしの諫はづかし／諷ふにも国のよしあし顕れて」（池田千句第六・五一）。一句では、世の中の善悪を知ることこそが、賢明さのあらわれであると詠む。「よしあしのことわりわかぬすゑのよに／かしこきひとはたれをつくらむ」（美濃千句第二・六六）。良いことと悪いことの分別がつくことが才知に富むことである。雑。

82　みぬ人こもる閨ぞゆかしき　　富隆

前句の「賢」しを立派なの意に取りなし、そうした男性が、まだ逢ったことのない女性を思い遣る心情を付けた。「見ぬ人をおもふこそなほゆかしけれ／あふ夜にくらき閨の灯」（老葉・巻五・恋上・八〇四）。まだ姿を見たことがない人が籠っている閨の中こそ、見てみたいと思う。雑、恋1（閨）。

83　たきしむる衣のをとなひかほりきて　　泰正

前句の「みぬ人」に逢いたいと思う理由を、その人が着ている衣に焚き染められたお香の匂いを嗅いだためと付けた。「心せよかさぬる衣の音なひはやはらかなるもしるかりぬべし」（草根集・七〇八二）。香を焚き染めた衣を着た人の気配が、香りが漂ってくることで分かる。雑、恋2（をとなひ）。

84　うしろめたきはとひすつる跡　　隠其

前句で衣を着た女性を愛した男性が、その後彼女を顧みることがなくなったと付けた。気が咎めるのは、女性を訪うておいて、顧みなかったことである。雑、恋3（とひすつ）。

85　化（あだ）なるは誰より又も契らし　　覚阿

前句で女性を「とひす」てた行為を「化なる」で受けた。

「夢になせ我おきふしの物思ひ／あだのちぎりは又もたのまし」（美濃千句第一・二二・紹永）。いいかげんで不誠実なのは、誰が相手であるかというよりも、とにかく再び来るよと約束を交わすことであろう。雑、恋4（契）。

86　あるかなきかのみちの一すぢ　　其阿

前句の「契」が果たされることがあるのか否か分からないと付けた。一句では、いまにも隠れて見えなくなりそうな一筋の道を詠む。「哀にもつくれる小田はわづかにて／あるかなきかの道の一すぢ」（東山千句第二・七〇・雅教）。あるのかどうかも分からない一筋の道。雑。

87　夏草は茂るをまゝの野べにして　　綱忠

前句の「みち」を「あるかなき」ものにしているのは、生い茂った夏草であると付けた。夏草を茂らせたままにしている野辺であって。夏1（夏草）。

88　くれてほたるのとびまがふ空　　忠広

前句の「夏草」に宿る蛍を付けた。「よのなかをなににたとへむ／夏くさにやどるほたるのよるのともしび（菟玖波集・雑体・二〇二三）。日が沈んで、蛍が飛び交っている空。「とびまかふ」は連歌になし。夏2（ほたる）。

89　海人の住里あらはるゝともす火に　　富隆

前句の螢の光を、海辺で焚かれる火に取りなした。「ほたる→いさり火」（合璧集）。『伊勢物語』八七段の「むかしおとこ、津の國むばらの郡芦屋の里にしるよしして、いきて住みけり（略）やどりの方を見やれば、あまのいさり火多く見ゆるに、かのあるじのおとこよむ。晴るゝ夜の星か河辺の蛍かもわが住むかたのあまのたく火か」に基づくか。灯す火の明るさで海女の住む里がはっきりと見えてきた。雑。

90　月は磯屋のすきまをもとふ　　泰正

前句の海人の住む家に射し入る月の光を付けた。磯屋は、波で荒廃したり、時雨が漏れるなど粗末な家であった。「風かよふ軒ばゝ松にうづもれて／すめるいそ屋は波に荒ぬる」（顕証院会千句第三・一〇・来阿）、「やどりさだめぬ舟のうらなみ／かりふきの磯屋のとまをもる雨に」（宝徳四年千句第三・三一・宗砌）など。月の光は磯辺の家の隙間からも射し入って、あまねく照らす。秋1（月）。

91　秋風や目ざましがちに吹ぬらん　　隠其

前句の「磯屋のすきま」から吹き入る「秋風」によって、目が覚めがちになると付けた。「風→すきま」（合璧集）。「目さましがちにあかし終けり／松風もまた聞馴ぬ山に来て」（称名院追善千句第四・六五[9]）。秋風が目を覚まさせがちに吹くのだろう。秋2（秋風）。

92　笛のとをねも露にしめれり　　元儀

前句の「吹」を風が吹きつける意から、笛を吹くの意に取り

なして付けた。「笛→吹」（合璧集）。笛の音が露とともに詠まれる例に、「さをしかのふえふくみねのおひ風にしのぶもぢずり露ぞみだるる」（夫木抄・四八五一・後鳥羽院）。遠くから聞こえる笛の音も露に湿っている（かのように寂しげである）。秋3（露）。

93　草かりの雫のしたみち分迷ひ　氏秀

「笛→草かり」（合璧集）。前句の「露」が置いている草を刈る光景を付けた。「草かり」は田の草を刈ることか。「春ふかき野べのさは水せきとめて草かりいるる賤がなはしろ」（文保三年御百首・一五一六・為相）。下道に霧が立ち込める様子は、「ふみわけんものともみえず朝ぼらけ竹のは山の霧の下道」（壬二集・一七三九）など。草を刈っているそばの下道に立ち込める霧をかき分けてさまよい進む。雑。

94　ひろふもむしはこゝにかしこに　隠其

「ひろふ」は、一句のみでは何を拾うのか不明である。前句の「草かり」の結果出た草、おちほを指すか。拾うと虫はあちらこちらにいることに気づいて。雑。

95　鳥鳥や日影におりてあさるらむ　忠広

前句の虫を鳥たちが漁っている光景を付けた。「鳥鳥」は前句と付いた時には、さまざまに、それぞれにの意で、思い思いに虫が存在するの意となるか。当該句一句では、複数の鳥達が餌を探す意となるか。また、「日影」は、日陰のことか。当該句に極めて類似した連歌例に「こほりぬる小川の水も暮れわたり／おつるひ日影にあさるとりどり」（文禄二年千句第三・三八）[10]。鳥たちが、日陰に降りてきて餌をあさっているのだろう。雑。

96　きえものこらぬ春のあさ霜　其阿

「きえものこらぬ」とは、消えて残らないの意。「も」は逆説ではなく順接。ただでさえ消えやすい春の朝の霜は消えて跡形もなくなる。春1（春）。

97　外面より折きて花をさすかめに　方信

前句の朝霜が付いている花を手折って来たと付けた。外では霜が降りていて、それが置いている花を手折ることで室内に、霜を持ち込む。外から手折って持ち帰った花を挿す甕に（春の朝霜は消えて跡形もない）。春2（花）。

98　仏のわかれとひ□□る袖　覚阿

99　［　］　眼阿

100　をと絶□□吹［　］　綱忠

おわりに

最後に本百韻の特徴をまとめる。

まず、百韻全体の四季・恋の句数と句去りについては、第32

句で恋句が一句で捨てられている。また規定上は春の句は三句続けるべきだが、第96句・第97句・第98句に関しては、三句目の第98句が摩滅により、句数が守られているか不明である。しかし、これら二点を除いた句数と句去りの違反は見られない。

また、月と花の定座も『産衣』の「月　表裏ニ一ヅヽ也。花ハ発句、脇、第三の外ハ折の面にせず。裏よりハいづくにても苦しからず」の通りに配置され、厳守される。このことは、当該連歌懐紙を巻子に仕立てる際に、錯簡が生じている可能性を否定する指標となる。紙の継ぎ目の句の繋がりは、四季・恋の句数、句意の観点からも現状に不審な点はないが、式目に則った定座の位置は、さらにこのことを補強し得るだろう。

では、次に句の詠みぶりはどうか。

第2句から第3句では、「ふるも」という語と「古巣」の語が隣り合うが、これは前句と次句の音が重なる点で、次々と世界観を転じていくことが主眼の連歌ではやや停滞の感があろう。同様に、第5句から第6句では「夜ふく」と「ふきかへ」と意味は異なるが、音が重複する。

また、一句の中で、語の繰り返しを伴う表現が散見される点も見逃せない。例えば、第34句「みち〳〵」、第49句「更〳〵」第65句「みる〳〵」、第70句「ゆく〳〵」、第95句「とり〳〵」である。

当該百韻の連衆には、時宗関連と思しき僧の参加が目立つ。同じく会津で詠まれた慶長期の連歌に、慶長三年に直江と其阿の両吟連歌がある。天正・文禄期の連歌・和漢聯句は、京都の作品が目立ち、連衆も上杉家の家臣と五山僧及び幽斎、紹巴といった歌人・連歌師で構成されていた。それに対して、会津若松に移封していた慶長三年から慶長六年の時期は、会津東明寺の其阿をはじめ、近隣の僧との関係性が浮かび上がってきた点が、注意される。

今後、会の興行背景、会津時代の上杉家の文化活動解明の足掛かりとなる資料として看過できない。

注

特に断らない限り、歌集・定数歌は『新編国大観』に、家集は『私家集大成』に、連歌は『連歌大観』及び『千句連歌集』に拠った。引用本文の表記は私に改め、傍線等を付した場合がある。

(1) 川﨑ほか「直江兼続一座漢倭聯句百韻「楓散風紅色」注釈」(慶應義塾大学『三田國文』第六〇号、二〇一五年)、川﨑「戦国期の詩歌百首:「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」について」(『和歌文学研究』一一六号、二〇一八年)など。

(2) 『鷲宮町史』通史・中巻、鷲宮町、一九八六年。

(3) 今井清見氏「直江筋書」第二巻(市立米沢図書館蔵)。

(4) 『戦国人名辞典』(吉川弘文館、二〇〇六年)、『三百藩家臣人名事典』(人物往来社、一九八七年)、花ヶ前盛明氏編『上杉景勝のすべて』(新人物往来社、二〇〇八年)、藤木久志氏『戦う村の民俗を行く』(朝日選書、二〇〇八年)。

(5) 前掲注(3)同書。

(6) 新日本古典文学大系『竹林抄』(岩波書店、一九九一年)。

(7) 大阪俳文学研究会編『兼載独吟「聖廟千句」第一百韻をよむ』(和泉書院、二〇〇七年)。

(8) 大阪天満宮蔵。私に漢字をあて表記を改めた。

(9) 『京都大学蔵貴重連歌資料集6』(臨川書店、二〇〇二年)所収「称名院追善千句注」参照。

（10）熱田神宮蔵。私に漢字をあて表記を改めた。

［付記］ 資料の閲覧・翻刻・写真掲載の御許可を賜りました埼玉県立文書館及び長野幸三氏に篤く御礼申し上げます。

（かわさき・みおん）